

過越

「あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは【主】への過越のいけにえである。」(出エジプト記12:11)

歴史的背景

イスラエル人がエジプトを出たとき(前1445頃)から、ヘブル人(イスラエル人と同じ、後にユダヤ人と呼ばれる)は毎年春(受難日、復活祭—イースターの頃)に過越を祝ってきた。

ヘブル人は400年以上にわたってエジプトに奴隷として仕えてきた。あるとき神はアブラハム、イサク、ヤコブの子孫たちを解放するための行動を開始された。モーセを選び備えをさせ、イスラエルの出エジプト(エジプトからの集団出国)を指導するように任命された(出3:-4:, →「出エジプトの経路」の地図 p.149)。モーセは神の言われた通りに行き、パロと対決して「わたしの民を行かせよ」という神の至上命令を伝えた。パロがそれを拒んだので、神はこのメッセージがどんなに重要であることを示された。そしてモーセのごとくに超自然的力を与えて、モーセがエジプトに対してさばきを宣告するたびに様々な疫病や信じられないような災害を送られた。いくつかの災害の間にパロはたまたまなくなってイスラエル人が出て行くことに同意した。けれども災害が終るとパロは考えを変えた。神が10番目の最後の災害を送られたとき、エジプト人はイスラエル人を行かせるほかなかった。神はエジプト全土に主の使いを送って、「人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を」打たれた(出12:12)。

イスラエル人もエジプトに住んでいたので、神は人々にこの災害を避ける方法を特別に教えられた。それに従うならイスラエル人の家族や初子はみな守られる。それにはそれぞれの家族は欠陥のない1歳の雄羊を取り、アピブの月の14日目の夕暮れ前に殺さなければならない。少人数の家族は1頭の子羊を隣の人と分けてもよかった(出12:4)。神はそれぞれの家族に、子羊の血を家の入り口の両側の柱とかもいにつけるように言われた。主がエジプト人をさばくために国中を回るとき、入り口に血がついている家の前は通り過される。そこから「過越」(「飛越す」、「過越す」、「宥赦する」という意味の《へ》ペサフ)ということばは来ている。こうしてイスラエル人はエジプト人の初子(動物を含めて)を襲った死のさばきから逃れることができた。神はイスラエル人を見分けて初子を襲う災害から守ることができたはずである。けれども、入り口に血をつけるように命じられたのは神に従うことの重要性を教えるためだった。神はまた、神のあわれみと私たちの罪の赦しは血の犠牲によって与えられることを啓示し始められたのである。最終的にこれははるか後の時代に神の御子イエス「神の小羊」が苦しみ、その犠牲的死を通して全世界の罪の代価を払うことを示すしるしだった(ヨハ1:29)。

最後の災害が来る夜、イスラエル人は身支度をして急いで出発できるように備えた(出12:11)。神は子羊を煮るのではなく焼いて、苦菜とパン種を入れないうんをを用意するように命じられた。夜が近付くと人々は急いで食事をしてすぐに出発する用意をした。エジプト人が来て国を出て行くように懇願するからである。そして神が言われたことがみなその通りに起こった(出12:29-36)。

イスラエル・ユダヤの歴史の中での過越

神の民は出エジプトのときから毎年春に過越を祝ってきた。それは神が、「代々守るべき永遠のおきて」であると言われたからである(出12:14)。エジプトでささげられたいけにえは自由を提供する役割を果たしたけれども、過越で殺されるいけにえはそのことの象徴である歴史的な事件を記念するものだった。神殿が建てられるまでイスラエル人は家族全員が家に集まり子羊を殺し、家の中からパン種を全部取除き、苦菜を食べて過越を守った。もっと大切なことは、そこで先祖たちがエジプトの奴隷から奇蹟的に解放された話を繰返し話したことである。こうして代々ヘブル人は神がどのようにして自分たちを救い自由にしてくださったかを

記憶し続けたのである(→出12:26注)。神殿が建てられると、神は過越の祝いといけにえをエルサレムで行うように命じられた(⇒申16:1-6)。旧約聖書には特別に重要な過越がこの聖都で祝われたことが記録されている(Ⅱ列23:21-23, Ⅱ歴30:1-20, 35:1-19, エズ6:19-22)。

新約聖書の時代のユダヤ人も過越を祝っていた。聖書に記録されている主イエスの少年時代の唯一の事件は、両親が過越を祝うためにエルサレムに連れて行ったときのことである(ルカ2:41-50)。それは12歳のときだった。その後も主イエスは過越のために定期的にエルサレムに上って行かれた(ヨハ2:13)。十字架で死なれる直前に弟子たちとともにされた最後の晩餐は過越の食事だった(→マタ26:1-2, 17-29)。主イエスご自身は信じる人々を罪と死から救う「過越の小羊」(⇒Ⅰコリ5:7)だったので、神のご計画通り過越の日には十字架につけられた。

長い間に儀式は変化したけれども、ユダヤ人は今もなお過越を祝っている。過越のいけにえをささげなければならぬと神が言われた(申命記16:1-6)エルサレムの神殿が今は存在しないので、今日の祭り(「セデル」と呼ばれる)には子羊のいけにえはない。けれども家族はともに集まり、パン種を全部家の中から儀式的に取り除き、最初の過越と同じような食事をする。そして父親が出エジプトの物語を繰返し話すのである。

過越とイエス・キリスト

キリスト者にとって過越はイエス・キリストを指し示す豊かな預言的象徴である。新約聖書はユダヤ人の祭りは「次に来るものの影」とであると教えている(コロ2:16-17, ヘブ10:1)。祭りのほとんどはイエス・キリストが罪のための犠牲となって神との関係を人類に回復してくださることを何らかのかたちで象徴している。出エジプト記12章は主イエスとその私たちに對するご計画を次のようなかたちで示している。

(1) 過越の出来事の中核は神の恵み、つまり受けるにふさわしくない神の好意を現すことだった。神がイスラエル人をエジプトから連れ出されたのは人々が神の特別な恩恵を受ける価値があったからではなく神が人々を愛しておられ、さらにご自分の約束に対して忠実だったからである(→申7:7-10)。同じように私たちがキリストからいただく救いも神の驚くべき恵みの結果である(→エペ2:8-10, テト3:4-5)。

(2) 門の柱とかもいに血を塗る目的は、その家の初子を死から救うことだった。この血は靈的死と罪に對する神の究極的さばきから私たちを救うために、キリストが十字架の上でご自分の血を流されることを象徴している(出12:13, 23, 27, ヘブ9:22)。

(3) 過越の子羊は、初子の身代りとしての「いけにえ」だった(出12:27)。このいけにえはキリストが私たちの身代りになられたことを示す。私たちは神に對して罪を犯したので死ななければならない。けれどもキリストは十字架で死んで私たちの罰を受けてくださった(→ロマ3:25注)。パウロはキリストを私たちのためにほふられた「過越の小羊」と呼んでいる(Ⅰコリ5:7)。

(4) 子羊は「傷のない」雄羊でなければならなかった(出12:5)。その子羊は完全な罪のない神の御子であるキリストを示している(⇒ヨハ8:46, ヘブ4:15)。

(5) 子羊を食べることは、人々を肉体的死から救った子羊の死と自分を同一化して受入れることを表していた。同じように主の晩餐あるいは聖餐式にあずかることは、私たちを靈的死から救うキリストの死と一体化することを表している(Ⅰコリ10:16-17, 11:24-26)。キリストの死は私たちの救いのために必要で、唯一可能な犠牲だった。今私たちは主の晩餐をキリストを「覚えて」記念として守る(Ⅰコリ11:24)。

(6) 門の柱とかもいに血を塗ることは従順な信仰の行動だった(出12:28, ⇒ヘブ11:28)。その信仰によって血によるいけにえは自由をもたらした(出12:7, 13)。靈的救いも私たちの靈的自由のために流されたキリストの血によって、「信仰の従順」を通して与えられる(ロマ1:5, ⇒ロマ16:26)。

(7) 過越の子羊と一緒に食べるパンにはパン種が入っていなかった(出12:8)。聖書ではしばしばパン種は罪と腐敗を表している(→出13:7注, マタ16:6注, マコ8:15注)、この種なしパンはこの世界と罪の象徴であるエジプトからイスラエルが分離して来たことを表していた(→出12:15注)。このことは神に従い、神との個人的関係を持つひとりひとりが罪深い世界から分離して神にのみ自分をささげなければならないことを示している(→「信者の靈的聖別」の項 p.2172, 「キリスト者とこの世」の項 p.2437)。